介護事業者はいま #547

❑複合型サービス桜ケア西線6条

（札幌市中央区）

「医療行為できたら長く関われたかも」

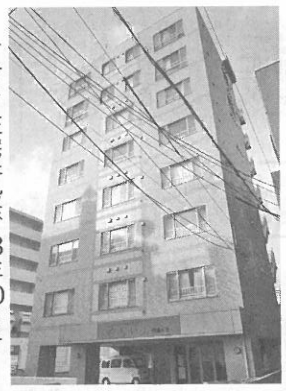
入院しても、なじみの住まいに戻れる環境

札幌市西区で2カ所の小規模多機能型居宅介護を運営してきた、さくら生活サポートがノウハウと実績を生かしつつ、「利用中に入院したとしても、なじみの住まいに戻って来ることのできる環境」を目指して2013年10月にオープンした、複合型サービス桜ケア西線6条（同市中央区）。医療、介護の境界をつくらず、利用者1人ひとりの思いやニーズに寄り添う個別ケアを真摯に実践している。

4年前に西区で開設した小規模多機能「花みずき」「陽だまり」それぞれの管理者を経て、13年10月の「桜ケア」オープンと同時に管理者に就いた加藤寛子氏は、3つ目の拠点に複合型サービスを選択した経緯を説明する。

「看護師を配置していても医療行為のできない小規模多機能では、インスリン注射や胃ろう管理の必要な方から利用相談があっても、お断りしなければならない。利用中の方でも食事を摂れなくなり、入院して胃ろうを造設したため、せっかくなじみの関係を築いてきたのに、再び受け入れることができなかったケースを経験し、『医療行為ができれば、もう少し長く関わることができたかも』という思いが残った」と振り返る。

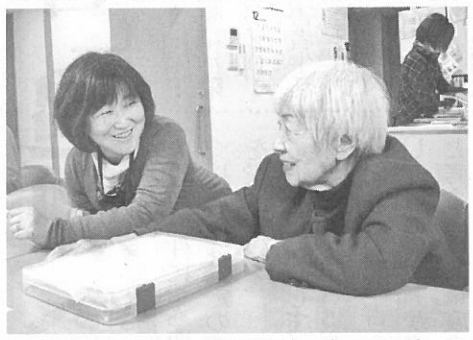
懸命に関係を築いてきたスタッフの士気低下も懸念され、次に事業所を立ち上げるなら「いったん入院しても、なじみの場に戻って来ることのできるサービスを」という現場の要望に、同社も理解を示した形だ。



サ付き住宅併設で13年10月オープンした「桜ケア西線6条」

開設計画が固まったところ、小規模多機能の利用者家族と、こんなやり取りがあった。もし医療的ケアが必要になったら、対応できる医療機関等に移らなければならないことを心配していた家族に、「複合型ができれば受け入れ可能。同じ法人なので顔なじみの職員もいて心強いはず」と話したところ、落ち着きを取り戻したという。

この利用者・家族を含め、実際に小規模多機能から複合型に切り替えた利用者はいないが、「選択肢のなかったこれまでと違って、こうしたことを言えるようになっただけでも、ご家族の将来への不安を軽減できる」という効果も実感している。



「1人ひとりに寄り添ったケアを実践したい」と話す加藤管理者

住宅併設、個別プラン沿って頻回訪問対応

オープンから1年を過ぎ、登録定員24人で登録者21人。平均年齢は80代半ばで、要介護1が過半数の12人、同2は4人と軽度者が多い。同3、同4が各2人、現在入院している人（定員12人）の利用実績はほとんどない。

同社が運営するサービス付き高齢者向け住宅「花らいふ西線6条」（2人部屋6室含む全26室）と同一建物内にあり、登録者の9割を入居者が占める。通所ケース。都心に近くアクセスも良いため、毎日のように顔を出す家族がいるほか、月1回ペースで企画する行事等にも家族が多数参加して団らんする姿が見られるという。

入居者の多くは、市内在住の家族が遠方に住む親を呼び寄せ、同居は難しいため独り暮らしでも安心して暮らせる住まいを選択したという。

利用者への日々の関わり方として「自宅で過ごしているような普通の生活の場をつくってあげたい」というスタンスは、同社運営の小規模多機能にも共通する考え方。加藤管理者、介護リーダーを中心に「一人ひとりの思い、ニーズに合わせた個別ケア」の浸透を図っている。

▲いつもの食堂で非日常を演出した「パンカフェ」。スタッフの子どもが取り分け、喫茶店風の衣装や生ギター演奏が気分を高めた◀

▲▶クリスマスパーティー、夏祭りなどのイベントは近隣に住む家族も多数招かれ、にぎやかな雰囲気▶

具体的には朝起きたら顔を洗い、歯を磨き、身なりを整えて1階の食堂で朝食を摂るなど当たり前のこと。介助を必要とする人も多く、早朝を中心に頻回な訪問で対応。その他の時間帯も服薬管理ほか、コール時に限らず部屋を訪ね、飲み物を勧め、ちゃんと寝ているか、体調はどうかなど、昼夜を問わず、こまめに個別プランに沿って訪問を繰り返し、生活をサポートしている。

地域のマッサージ師による個別指導も実施

住宅併設型は利用者との距離が近く、事業所内に担当ケアマネがいる複合型の機能と合わせて「サービス内容変更等にもタイムラグなく、迅速に対応できる」とメリットを挙げながら、15年介護報酬改定ではこうした部分は評価されそうになく、歯がゆい思いがあるという。

▲季節ごとに開かれる「生け花クラブ」、新年あいさつ文の模写など集中できる時間も大切にしている◀

介護・看護の境界つくらず柔軟対応

複合型開設に当たり難航すると考えていた看護師確保は、都心の好立地もプラスに働いて比較的スムーズに進み、現在7人勤務。介護職を含め18人で柔軟に1日6～7人のシフトを組む中、介護、看護の仕事に境界をつくらず、看護師も排泄介助、入浴介助、レクや歩行付き添いなど介護職と一緒に取り組む方針としている。

「利用者のどこからが医療で、どこまでが介護か、そういう境界はないと思っている。看護師が利用者との会話や日常生活の介助を通して看護師の目線で気付くことのできることもあるはず。直接的な医療的ケアでなくても、それも看護」と考えるからだ。

例えば日常会話を通した認知症早期発見、入浴介助中に見つけた傷や排泄物のにおい・色の観察も重要で、生活場面において介護職と看護職が柔軟に関わることのできる複合型の強みととらえている。

看取りに関しても真摯（しんし）に向き合うからこそ「安易に対応できると言えない、重たい言葉」と慎重な姿勢。家族、職員、主治医の統一した思いがあり、安らかな老衰であれば対応可能だが、「家族が本気でなければ、かえってつらい思いをさせてしまう場合もあるし、家族の気持ちは1つでなく変わるときだってある」。整理しなければならない、さまざまな要素があるとする。

現在は軽度者が多くを占めるが、将来を見据え、住み慣れたなじみの場でできる限り最期まで過ごしたいという利用者や家族の望みに応えられる体制を整えていく考えだ。

【運営主体】株式会社さくら生活サポート
【住　　所】札幌市中央区南6条西15丁目2―12
【電話番号】011（551）7200